

インカレが変わった。フットワークを軽くして社会変化に対応する。それが日本学連を存続させる唯一の道だ。

日本学生オリエンテーリング選手権大会
2005年3月12(土)-13日(日)
栃木県日光市 今市市



インカレ2005男子リレースタート！興奮の絶頂この素晴らしいイベントを未来にも！

待ったなし！地図経費節減

約690名。これが今回の日光インカレに集まった学生の数である。かつて1700名を集めたことがあるインカレに比べると、参加者は4割に過ぎない。6割にあたる1000人が会場から居なくなった計算だ。1700人インカレに参加していた世代のOBから見ると、ぐっと小さなイベントに映るだろう。

長い間学連に関与してきた私・木村から見てもインカレの規模が一回りから二回り小さくなった印象だ。

ただ、近年は学生の減少も下げ止まる傾向にある。昨年三重県青山高原で行われたインカレ(約650名)に比べてやや学生参加者が増えている。開催地域の違いだろうか。

日本のオリエンテーリングを取り巻く社会環境は変化しつつある。その変化の影響を最も早く受けるのが学連、そしてインカレだ。当然ながら学連加盟員にベテランと呼べる選手はいない。少子化や学生のサークル離れ、オリエンテーリングの知名度低下は学連を直撃している。加盟者数の激減、そしてインカレ参加者数の低下だ。インカレ

参加者数の低下はそのまま大会会計を直撃する。大会としてはどこかで経費節減を図るしかないのだ。

こうした事態に学連は素早く反応し、インカレ改革を断行、経費節減に努めている。今回の日光インカレは改革の初年度にあたる。

今まで春インカレで行われていたロングディスタンスを秋に移動して、春インカレはミドルとリレーの2本立ての2日間大会となる。ミドルとリレーはともに出来る限り会場を共通とし、地図作成も1枚を基本とする。

これにより春インカレ最大の経費であった地図作成経費を節減しているのである。

男子リレー3人制に

今回のインカレからリレーも3人制に移行している。世界選手権も4人制から3人制に移行したので、それに追従したかのように思われるが、必ずしもそうではない。

世界選手権の場合、3人制への移行理由はテレビ放送対応である。テレビなどの放送メディアに取り上げてもらうためには競技時間2時間以内が必須だ。これ以上の競技時間のスポーツを生中継することは放送局側からすると考えにくい。

リレー完走率アップ計画

しかし、学連の場合、もっと違う理由で競技時間の短縮を行なう理由があった。それは完走率を向上させることである。

従来のインカレリレー男子では4人制をとっていた。トップ争いをする大学は実力の高い4人を揃えることができた。しかしインカレ中位の大学では4名揃うことは可能だが、全ての選手が選手権クラスをきっちりと走れるメンバーばかりではない。

そうしたチームではメンバーの一人が失格になったり、大きく出遅れて結局競技時間内にチェンジオーバーできなくなる様なケースが多かった。

このため4人制の頃には完走率50%というインカレもあった。遠くまで大学を挙げてインカレに参加した結果、半分の大学が失格となる・・・これがその後のオリエンテーリング活動の良いモチベーションにつながるだろうか。

こうした問題が以前より学連内部でも指摘され、4人制末期の頃はインカレ大会コントローラから意図的にウイニングを短めに設定するように指示が出ていた時期もあった。

まだ4人メンバーが揃えられる大学はいいほうで、メンバーが揃えられなくて選手権参加を見送る大学もあっただろう。実際に同一大学の女子選手が男子選手権リレーを走ってよいかという真剣な問い合わせがあったものこの頃だった。

選手権クラス参加者の実力バラツキが増えたのは、大学クラブの部員数が減っていることと無関係ではあるまい。

3人制への改革の効果は顕著だった。今年の男子の完走校は23校。参加校が27校だから85%である。昨年は20/26(77%)、2年前が15/27(56%)と4人制の頃と比べると格段に向上している。

実際に会場に居ると、4人制だった昨年に比べてみて会場に活気があり、盛り上がっていた。



一ツ橋大学。男子リレーで22位。上位に入らなくてもインカレの魅力を感じてもらえる大学を増やすことが学連を支える力になる。

過去を懐かしんでも仕方ない。出来ないことは出来ない。今の学連にとってナニが最良なのか。お金がないなら知恵を絞る。学連の活力は日本のオリエンテーリングの活力に直結している。

(木村佳司)